

平成艸紙



おりおりの記

琳派のシャンソン

静岡県立美術館 館長

芳賀 徹

○此春は、花にまさりし、君持ちて、青柳の糸、みだれ候

「この春は花よりも美しいあなたがいて下さって、わたしの心の青柳の糸はもう乱れっぱなし」

隆達りゅうたつ小歌のなかの一首だ。これは若い女がすてきな男を前にして、少々せうせうの媚びも含んで嬉しげに自分の恋心を訴えているのだろう。「みだれ候みだれこう」の「そろ」が可愛いではないか。私は京都で藝術系の大学の学長をしていたとき、入学式の訓示にこの一首を引いて、皆さんも在学中にぜひこんな恋の経験をしなさい、などと説いたことがあった。鴨川のほとりに柳の糸がそよぎ始めている頃だった。

○夢はへだてず、海山を、こえてもみゆる、夜な夜なに

「夢はうれしい、遠くに行ってしまったあなたの面影を、海山のへだたりをこえて毎夜毎夜、見せてくれるのだから」

これも切ないいい一首。私は三年前に先立った妻をひそかに偲んで、これを今年の年賀状のなかに引いた。

隆達小歌とは、堺で薬種と貿易に携わった豪商高三家たかさぶの才人高三隆達（1527～1611）が作詞し、さらに作曲もした歌謡集。五百首ほどもあるらしい。おそらく隆達自身ひとよざり一節切の竹笛や小鼓の伴奏で、洪い声で口ずさみしたのでだろう。桃山の終りから徳川初期にかけて、上方の町衆かみがたの間で広く

愛唱されたという。隆達は京の豪商角倉了以すみのくろりょういの長男で大教養人の角倉素庵すあんや、彼を介してか、俵屋宗達らとも交流があったようだ。現に、宗達風の藤の花や孟宗竹を木版の金銀泥下絵にした絵巻に、素庵が隆達小歌を流麗な筆で書きつらね、巻末に隆達が署名して、京のもう一人の豪商、三代茶屋四郎次郎に贈った佳品が、今日に残されている。



藝能万般に才を揮った隆達は、いわば琳派の源流につらなるシンガー・ソングライターだった。今年ことしは光悦が徳川家康から洛北鷹ヶ峰の所領を与えられて四百年、京都は記念事業で大賑わいである。「琳派四百年」の催しには、隆達小歌をシャンソンに仕立てて歌う試みもあった。

○あすをも知らぬ、露の身を、責せめて言葉をうらやかに

○の（退）かい（致）はなさい（ねえっ、放してよ）、帯がとくる、今にかぎらふか、逢はふ物を

○かへるすがたを、見むとおもへば、きりがの、朝霧が

パリのシャンソンもすてきだが、隆達小歌はもつと小粋で、風流で、しかも切々と訴えてくるではないか——少くとも私たちの心には。